

一宗匠誕生の周辺：水間沾徳覚書（一）

白石，悌三

<https://doi.org/10.15017/2332816>

出版情報：文學研究. 62, pp.79-99, 1963-09-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



一 宗匠誕生の周辺 ― 水間沾徳覚書 ―

白石悌三

はじめに

昭和五年刊『葛藤』の著者は、「宗因は極蘊のはいかい、沾徳は判読の博士といひ、其角は作中の作者、嵐雪は換骨有心、素堂は高絶、その外はしらず。」とまで言つた。もとよりその立場に偏した見方ではあるう。しかし、安永四年刊『俳諧五子稿』が言水・去来・素堂・来山に沾徳を選び、また寛政十一年刊『十家類題集』が芭蕉・其角・嵐雪・麦林・素堂・言水・蕪村・来山・希因に沾徳を選んで各々の句集を編んでいるのを以つてしても、江戸時代の沾徳評価は決して低いものではなかつた。『日本文学大辞典』（昭9・萩原蘿月氏執筆）『大人名辞典』（昭13・高木蒼梧氏執筆）の類にも沾徳の項目は洩れていない。それ程の俳人でありながら、辞典的記述を出て研究の対象となる事は近年まで甚だ少なかつたといわねばならぬ。頼原退蔵博士が「享保俳諧の三中心」（昭11・『俳諧史論考』所収、以下頼原説）として、はじめて淡々・不角と共に大きくとりあげたのがその第一段階、鈴木勝忠氏が一連の江戸座研究を踏まえた「水間沾徳・貴志沾洲」（昭34・『俳句講座3』所収、以下鈴木説）において、新しい俳諧史観による位置付けを試みたのが第二段階、小高敏郎氏が「芭蕉と三人の友」（昭35・『連歌俳諧研究20』所載、以下小高説）として、素堂・安適と並べて芭蕉を巡る当代文壇に視野を広げたのが第三段階、殊に第三段階において、林家門人帳『升堂記』にその名がみえる事が報告されたのは、沾徳像の形象に新しい拠り所を与えた。

小生も先に「水間沾徳年譜」（昭34・『連歌俳諧研究19』）を発表し、伝記的事実の大半は尽したが、万事に制限のある年譜形式のため、証明と解釈を欠いだ結論のみの羅列にとどまつていた。今、発表後に気付いた点の補訂をかねて、覚書の筆を執ろうとする所以である。その手始めとして、沾徳が職業俳人として誕生する以前を考察しておきたい。

『註』「一字幽蘭集」は堂々たる処女撰集であつた。序をよせた素堂は「沾徳水氏嘗好俳優之句遂業之」と記している。かつて俳諧を好んだ一人の少年は、いかなる青春の感いへて遂にこれを業とするに至つたのか。彼自らは巻末に収めた歌仙の序に、「七人五百七十歳白

家に会せることをおもふに、予三十になり侍れば、いまだ高年のたのしみうらやみてはるかなり。若年より芸にあそぶ人をうらやむに、七人百十五歳、なお五百七十歳の春秋をしるべき友と志をよるこびて、元禄三年十一月上旬に合歡堂によびあつめ侍る。」と記している。百ヶ日追善集『水精宮』以来「俳諧大辞典」に至る定説に異をたてて彼の生年を一年遡らせる論拠とした箇所であるが、そこには

「若年より芸にあそぶ人をうらやむに」遂に宗匠として不惑に達した人生の時点が、安定した将来への見通しのもとに語られている。彼の後半生は、その道を時流のままに抵抗もなく歩みつづけて順調であつた。過渡期の流れは晩年の彼を俳壇の覇者に仕立てて、世評に任せた。功成り名遂げた彼をみて、人は彼以前の彼を考えようとしなない。もちろん沾徳のように、過去の陰影が生を意識をはばむような事のない俗物においてはそれも尤もであるが、無意識裡にも遠い草原の輝きを映さぬ晩年はあるまい。それが過渡期であれば尚更である。宗匠以前、今のところその間を語る唯一の資料として、次に掲げる『俳家奇人談』（竹内玄一著、文化十三年刊）の一節を逐条検討しながら論をすすめていきたい。

水間次郎左衛門は江戸の人、その磨工たりし時より、俳諧を好んで、露言を師とす。折節は風虎・露沾の二公の御側にも列なりしが、一年飛鳥井雅章卿、和歌の事により、奥の岩城へ左遷の時、露公その鬱悶を慰めまいらす御伽のものを撰ばせらる。然れども皆荒々敷き武夫のみ故、公家上達の相手には応ぜず、如何すべきと思案の折りから、次郎左衛門を進むる者あり。便ち召出されて、爾爾の旨語り聞せ、剃髪せしめて、名を友斉と改めらる。彼の卿三年ほど配所におはしけるに、朝夕御側に侍りて和歌の道、古き事など憚りなく尋問せりとぞ。程なく帰洛し給ふの頃、友斉にむかつて曰ひけるは、汝かならず和歌にたづさはるべからず、只俳諧のみ修行すべしと。其の生れながらにして滑稽の才ある事しんぬべし。直ちに露公の教へを受く。はじめ露葉といい、後沾徳と改む。

〔註〕『水精宮』に享年六十五とあるを逆算して寛文二年生れとするが定説。本引用による逆算ではおそくとも寛文元年生れとなる。

『水精宮』の編者仙鶴とて聞き書きであろうから、確証とはならぬが一応本人の言に従う。因みに、『綾錦』『俳家大系図』を

踏襲して『日本文学大辞典』『大人名辞典』が六月三十日没とするのは五月三十日没の誤りである。

一、露言と露沾

「江戸の人」というのは、墓所が江戸本所の法恩寺にあることから首肯できよう。後に沾徳も一座した享保三年の仙台大崎八幡宮奉納歌仙の額（荻野清氏紹介「ひむろ114」）に

内藤下野守

露沾

岩城城主 内藤豊松

沾城

同 家臣 池田団次郎

沾荷

同 松田隼人

芳津

同 三浦左助

右巴

同 中嶋定八

沾梅

同 水間伊六

沾薄

同 保生左太夫

立圃

同

由之

（以下略）

とあり、彼等は井筒屋の『誹諧大三ッ物』によれば享保七年の歳旦にも、又『露沾俳諧集』によれば享保九年の露沾古稀の賀にも一座している。ところがここに岩城家臣とみえる沾薄は、大須賀次郎著『磐城史料』によれば「沾徳の甥、水間氏紋太夫」とされているので、もともと水間家とは岩城家臣で沾徳もその出かと思つてみたが、『一字幽蘭集』の露沾序に「かれは先年、岩城に下り、云々」とあり、集中にも岩城に住侍りし比、江戸に來りて

夏山を出てあかるしもの、江戸、

沾徳

とあつてやはり江戸の人のようである。霰石太郎氏にお尋ねしたところでは、現在当地に水間姓の家はなく、当時の分限帳にも見当らないということであつた。大正大震災の後に再建された法恩寺の墓の撰文によると「沾徳者東府之人其先出自泉州水間而松瀬青々先生継母実屬其後裔」（塚本虚明「水間沾徳墓碑改修成れるに就き」『鴛鳥・昭13・5』）とあるが、明らかにしない。

「磨工」即ち刀研師の出というのは他にみえない説であるが、ありうる事ではある。同じ露沾門の俳人沾涼も、柳川直光門下の鐺師として有名であった。ところが『奇人談』の記事には数々の誤りがあり、沾徳に關しても享年を六十二（実は六十六）とするほか後述するような錯誤をおかしている。で、沾涼の項に彫工としての言及がないのは、逆に沾徳の伝記と混同しているのではないかと疑わせる。化政期の沾徳伝には、墓所について「浅草誓願寺」（文化十五年刊『江戸名家墓所一覽』）、師系について「はじめ一品門人」（『耽奇漫録』瀧沢馬琴筆）など沾涼と混同される事が多かったからである。

「露言を師」とした事は、沾涼がまだ關係者生存中に於た『綾錦』で、沾徳について「露沾公門、元調和門」とし、また「御表徳ノ兩字一字宛露言沾徳ニ下ル」と記している。一応は信用できよう。露言の住居は通り町筋の南伝馬町であつたから、おそらく沾徳は近所に住んでいて、ちよいちよい顔を出していたに違いない。そのうちには才を愛でられて内藤風虎のサロンへ伴われる事もあつたのであらう。その折、沾徳はこのサロンで一番年若い露沾の恰好のお相手であつたに違いない。既に寛文五年、露沾は後嗣に決定していた。若君の寵をえた沾徳とその師に俳号が下つたのはいつの頃であらうか。

「露言」の俳号がみえるのは延宝六年からで、延宝四年刊『続津珠』までは本名の福田政孝である。延宝二年に成つた『桜川』は風虎の撰であるにもかかわらず「調也」で、未だ調和門がある事をはつきり示している。とすると、鈴木説の如く入門の語は憚るにしても、内藤家に縁を結んだ時期はおおよそ延宝五年頃と決まってくる。沾徳が露沾公よりいただいた初号沾葉ではじめて入集するのが管見の限りではやはり延宝六年刊『江戸新道』であるから、彼の俳壇登場は内藤家に結ばれたとほぼ期を一つにしている。当時十八才であるから、それ以前に露言に師事したといつても手ほどき程度でしかありえず、俳号を持っていたかどうかともわからない。沾徳自身、師礼をとつたような風は『沾徳隨筆』（以下「隨筆」）にもみえないし、露言没年の翌年に出たかの処女撰集にすら、三三三八二句を収めて露言は一句、綴花中の一輪でしかない。にもかかわらず露言との關係を無視できないのは、俳壇登場以後、風虎の死に至る初期の入集系列が『坂東太郎』（才丸編）『富士石』（調和編）『金剛砂』（調和編）『題林一句』（調和編）『花時鳥』（子英編）『白根嶽』（調実編）と専ら露言と期を一つにして調和系だからである。このあまりにもはつきりした軌跡は、内藤家傘下にあつたといへば元來調和門の露言が、沾徳をしてひときわ息づいてはなやかな当代俳壇にのぞましめる唯一の窓であつた事を示してあまりある。『綾錦』に「露沾門」というのは露沾退隱後の記事であり、当時大名であつた風虎も後嗣であつた露沾も当然ながら宗匠ではなかつた。

先にふれた沾徳の岩城住について、こどもう一度露沾の序を引こう。「かれは先年岩城にくだり、此道にくるしみ待りて風虎君の心をうけつぎ、予とおなじく道をたのしみ侍れば」という岩城下りの時期には、『金剛砂』と『題林一句』の間、天和元・二年の俳歴の空白をあてることができよう。思うにこれは内藤家への出仕を意味するのではなからうか。風虎・露沾に親炙するうち寵を得て、既に早く出仕し、やがて正式に御領地へ召し連れられたものと思われる。でなければ、江戸に生れ江戸に育った若冠の青年が、何を好んでみちのく辺りまで出かけて二年間を過したりしよう。俳諧修業ならば風虎に就かずとも、露沾も露言も江戸に在ってこの間入集している。参勤交替のお国帰りに召し連れられたとみるが一番妥当ではないか。門田から水間への改姓もこの機に想定する事ができる。しかしもとと沾徳が懂れたものは武ではなく文、内藤家サロンの雅びやかな雰囲気であった。風雅の君のお側にはべるを夢見ての出仕も、寂しい北国の生活では期待に違ふ事が多かったであろう。「若年より芸にあそぶ」の心は、とらわれない生活を求めて日に日につのつていたに違いない。折から天和二年二月二十一日、露沾は突如として家督を弟に譲り退身した。この事件が沾徳に与えた衝撃は大きかった。彼はこの時出仕に望みを失った。お家騒動がからんでいたらしいが、原因の一つに岡田利兵衛氏は、「御父子ノ間不和ヲ生ジ」(内藤家旧記)たらしく延宝五年に風虎が露沾に家訓を与えている点を指適される。(「内藤風虎」国語と国文学 昭23・4、以下岡田説)

露言と沾徳が内藤家に縁を結んだとみなした延宝五年に、風虎と露沾の不和は兆していたという。風虎編の『六百番俳諧発句合』が成ったのはこの年であるが、この句合に調和は参加していない。急速に露沾と近づく沾徳に反し、次第に幽山一派に占められてゆく内藤家サロンにおいて、調和門の露言の位置は微妙であった。それでも万治の昔から江戸貞門との交渉を持つ風虎の健在なうちは、又その風虎を要めに江戸俳壇がひととき統一の様相をみせていた延宝年間には、それも目立たずによかった。だが延宝の新しい波が去り、俳壇が俳系に従って再編成され始めると、古い俳系につながる露言の立場はむづかしくなった。また風虎あつてこそ露沾にも師礼をとってきたが、サロンの中心が風虎からやがて退身した露沾へと移項するにつれて、親子ほどにも年の違ふ露沾の周囲に形成されるグループの雰囲気、なじみ難いものとなってゆくのは無理からぬ事であった。実は蕉風はそこから芽生えた。沾徳が岩城下りの空白もあつて、この萌芽期に自分を責めなかったのは詩人として惜しまれる。かえりみるに沾徳が俳壇に登場した時期は将に新人の季節であった。延宝六年には言水・幽山・不卜が、七年には調和・才丸が、八年には桃青及び其角・杉風が各々処女撰集を發行した。彼等は江戸という新興都市の上げ潮に乗って音をたてて流れて行った。ところが沾徳は彼等より常に半歩おくれていた。宗因風においても、今また蕉風においても、彼は

撰者ではなく入句者、旗手ではなく追従者、自ら時代を拓いて行つたグループに常に半歩おくれていた。この半歩の差が、何十年かの後彼をしてグループが死に果て次の世代が伸びなやむ間の覇者となしてしまつたのだが。

貞享二年九月十九日、風虎の死は沾徳と露言にとって決定的であつた。時に露言は五十六才、露沾は三十才、沾徳は二十五才、彼等にとつて将に一幕が終つた。その年の十二月序をもつ「ひとつ星」(調和編)で、沾徳ははじめて露言と軌跡を分つて入集しなかつた。露沾は句を送つたがこれを最後に積極的に蕉門と近づき、調和とは遂に再び手を結ばなかつた。露言は露沾の動きに従えないまま、調和が一時俳壇を退いて前句付の点に専念したので沈黙して終つた。そして俳系を持たぬ沾徳は当然、若き露沾に従つた。風虎の死は、沾徳を一応内藤家との過去から解き放つた。同じ十二月、露沾の異母弟義孝が七代家督を嗣いだ。おそらくこの時沾徳は致仕し、代りに甥を新君に仕官させたのではあるまいか。前述した水間紋太夫である。そしてこれを期に沾葉を沾徳に改め、俳諧宗匠として立つ決意を固めた。「予と同じく道をたのしむ身になつたと露沾がいう所以である。殊更に「風虎君の心をうけつぎ」というのも、家督をつがず、仕官を続けなかつたの云ではあるまいか。一年間の喪があけて、貞享四年ここに新生面を開く積極的な活動が始まる。三月には露沾・其角・露荷・嵐雪・虚谷等と春興の歌仙に一座し、五月其角亡母五七日追善の席には露沾・芭蕉・嵐雪・挙白・去来・野坡等と句を手向け、九月芭蕉帰郷饒別の歌仙には露沾・沾蓬・露荷・其角等と列なつた。この時、素堂・安適等も各々詩歌を饒別している。そして十一月、前記の春興歌仙ほか三句を収めて其角の『続虚栗』は刊行された。

二、飛鳥井雅章

「飛鳥井雅章卿、和歌の事により云々」は、たとえば『風のしがらみ』(土肥経平著)が

寛文元年大納言雅章卿閑東下向のとき、大磯にたれ名付しにや鳴立沢といふ所有。ここにて

あはれさは秋ならねども知られけり鳴立沢のむかし尋ねて

此沢の辺にいとおもしろく住なして侍る僧にかたりよりて

心あれやあるじゆかしく住なして鳴立沢に結ぶかり庵

大納言帰洛し給ひて、此歌ども奴覧に備られしに、西行法師の心なきの歌はいづくにもあれ、鳴の立るし沢にて、こことさしてよめるにはあらぬを、今此所を鳴立沢といふ名所になしてよめる事、大なる僻事也とて、しばし出仕をとめられけるとぞ。

と伝える事件に相違ないが、寛文元年は私見によれば、飛鳥井雅章が生れた年であつて年次があわない。飛鳥井雅章が死んだのは、徳政十九才の延宝七年十月十二日なので、念のため寛文元年から没年までの雅章の動静を、松平文庫・中川文庫・小城鍋島文庫等に蔵する禁中の詩歌御会記録及び中川文庫蔵の『飛鳥井雅章御詠草』によつて調べてみたが、次に示すように岩城左遷を肯かせる如き三年間のブランクはどこにも見出されない。まだこの年表は資料の博搜によつて埋められるであらう。

寛文元年

- 5・21 仮殿御会
- 6・25 聖廟御法衆
- 7・7 御当座
- 9・9 御当座

寛文二年

- 1・19 御会始
- 1・24 御当座(発声)
- 2・17 御当座(出題)
- 2・仙洞御屏風色紙
- 3・16 御当座
- 3・新院御会始

- 6・25 聖廟御法衆
- 7・7 御当座(出題)
- 9・9 御当座(出題)

寛文三年

- 1・19 御会始(出題)
- 2・12 新帝御代始御会(出題)

寛文四年

- 1・18 新院御会始(発声)
- 2・10 御会始(出題)
- 6・1 新院水無瀬御法衆
- 6・1 新院住吉御法衆

- 6・1 新院玉津鳥御法衆
- 6・25 聖廟御法衆
- 8・15 御会
- 10・7 新院御会

寛文五年

- 1・19 御会始
- 1・23 新院御会
- 6・12 新院御当座
- 7・7 御会
- 9・9 御会(出題)

寛文六年

- 1・19 御会始
- 1・21 新院御会始(出題・発声)
- 2・22 水無瀬御法衆
- 2・25 聖廟御法衆
- 2・30 飛鳥井家会

- 5・18 新院御当座
- 6・14 新院御当座
- 7・5 新院御当座
- 8・15 新院御当座
- 9・9 新院御会
- 9・13 新院御当座

- 10・14 新院御当座
- 11・21 新院御当座

寛文七年

1・19 御会始 1・25 新院御会始 (出題) 2・13 新院御当座 2・25 飛鳥井家会 9・13 新院御当座

寛文八年 1・19 御会始 1・22 新院御会始 1・28 飛鳥井家会 (発声) 8・15 御当座 (出題) 9・13 御当座 (出題)

寛文九年 1・19 御会始 (出題) 1・22 新院御会始 1・25 飛鳥井家会 8・15 御当座 (出題) 10・14 新院月次御会

寛文十年

1・19 御会始 1・23 新院御会始 2・18 飛鳥井家会始 (発声) 2・22 水無瀬殿御法衆 4・16 新院御当座

4・19 御当座 4・24 月次御会 5・24 月次御会 7・7 御会 8・15 御当座 (出題) 9・4 新院御会

9・9 御会 9・13 御当座 (出題)

寛文十一年

1・19 御会始 1・23 新院御会始 2・5 飛鳥井家会始 2・16 御当座 5・5 新院御会 8・13 御当座 (出題)

9・9 御会 9・13 御当座

寛文十二年

1・19 御会始 1・22 新院御会始 1・28 飛鳥井家会始 7・7 御会 8・15 御当座 (出題) 8・25 聖廟御法衆

9・9 御会

延宝元年

1・19 御会始 1・23 新院御会始 1・28 飛鳥井家会始 4・御当座 6・25 聖廟御法衆 (出題) 8・15 御当座

9・9 御会 9・13 御当座 (出題) 9・24 御会御当座 (出題)

延宝二年

1・19 御会始 (出題) 1・23 御当座 1・27 新院御会始 2・11 御当座 (出題) 2・16 飛鳥井家会始 (発声)

5・4内侍所御法楽（出題） 7・7御会（出題） 8・15御会（出題） 8・29御会 9・9御会（出題） 12・御会
延宝三年

1・1仙洞御会 1・19御会始 1・23新院御会始 1・25御当座 2・11飛鳥井家会始 2・21御当座（出題）
2・22水無瀬御法楽（出題） 2・25聖廟御法楽（出題） 7・7御会 9・9御会 9・13御当座
11・14法皇八十賀御会

延宝四年

1・19御会始（出題） 1・23新院御会始 2・22水無瀬御法楽 2・25聖廟御法楽

延宝五年

1・19御法楽 1・23新院御会始 1・27御当座（出題） 2・29後十輪院廿五回忌 10・24法皇新殿御会

10・2慈眼大師三十三回忌追善檀那院僧正法納

延宝六年

1・19御会始 1・22新院御会始 1・25聖廟御法楽 2・23飛鳥井家会始

ところが『史料綜覧』によれば、慶長十四年七月四日飛鳥井雅賢等は姦通事件が発覚して勅勘をうけ、十一月七日雅賢は隠岐に難波宗勝は伊豆に流された。参議鳥丸光広以下の公卿衆が連座する有名なスキヤンダルであった。三年後の慶長十七年前近衛権少将難波宗勝は勅免になったが、少将こそ実は飛鳥井雅庸の二男で、翌年には名を雅胤と改めて飛鳥井流を相続した。つまり雅庸の三男雅章にとつては兄に当る人である。その伊豆配流には異説があつて、岩城配流を説く『盤城史料』もその一つ、「配所は菊多郡土遠野にあり。（今円通寺の役寺前なる畑を里老相伝へて飛鳥井圃といふ是なり）——中略——相伝ふ、少将配所にて庶女二人を儲けらる。慶長十七年勅免帰洛の時、伴ひ帰へらる。別に臨み一首の悲歌を便面に書いて箕箒に侍せし女に与へらる。其歌伝はらず。惜むべし。配所の徒然を慰めんとして時々伺候せし者共へは、帰洛の時に、汝等伊勢参宮に上らば、必ず吾館へも立寄るべしなど、懇に留別の辞ありしと。」と土地の伝えを記している。もとより内藤家が封ぜられる以前の話で、沾徳は生れてさえない。雅胤と雅章の、兄弟それぞれに有名な伝説が混同されたわけである。しかし沾徳伝に関する限り、これは単なる誤伝として済ますわけにはいくまい。誤伝の生ずるところ、逆に雅章と沾徳

の間に何らかのつながりを想起させる。

沾徳が出仕した岩城城主風虎の歌集「左京太夫義泰家集」八巻の中「六巻一千余首は加点をうけた作品ばかりが集められ、加点者は後水尾天皇・道晃法親王・中院通村・同通茂・鳥丸光広・飛鳥井雅章・日野弘賢等であった。」(岡田説)という。『かような文学大名に親炙しておれば、堂上歌壇のあれこれについて見聞の機会があった筈である。』『随筆』に富士の句について自解した後、次のように記している。

予おもふにむかし飛鳥井雅章卿の関東下向の頃

かたりつぎいひつぐや誰をよぶべきことのはもなき不二の高根は

といふ歌まことにしたはるるなり。かたりつぐいひつぐは万葉の詞也。中院通茂卿の下向の時、家隆の立もをよばぬの歌を思ひては富士に歌もなきと感られしはまことによりもまさりはべらん歟。

雅章は万治四年から寛文十年九月十日まで、その後をうけて通茂が延宝三年二月十日まで武家伝奏となっていたから、二人の下向はこの間のことである。風虎もそれを機会に親しく接した筈である。しかし沾徳は寛文十年にはまだやっと十才、直接歌学を聞くには幼なすぎたし、お伽に出るにも内藤家との縁がまだ結ばれていなかった。従って「奇人談」のいう如き雅章と沾徳の関係は、事実において否定されねばならない。風虎のほかに、しかし伝説の生まれる背景はまだ豊かであった。

武家伝奏として江戸に下る雅章をもっとも歓迎したのは、江戸歌壇、就中長嘯子門派、戸田茂睡一派、水戸派の歌人達であった。小高氏は「和歌と歌学の場合——公軌・春正より茂睡・契沖まで——」(国語と国文学 昭29・4)において、「春正、宗好、立易、宗川のグループが飛鳥井雅章の出題で歌会を開いたりした事実は時折に見られる。飛鳥井雅章が江戸歌壇で堂上派の歌人として尊敬せられ、勢力のあつたことは確実であろう。」と述べておられる。その山本春正について、『随筆』に後撰集の「おく山にたてらましかば渚こぐ船木も今や紅葉しぬらん」を引いて「此歌を以春昌は船木と名字せしなり」と触れているが、『水精宮』所収の淡々・仙鶴両吟の註(以下両吟註)によれば「徳が歌道ハ春正ニ学ブ」という。春正の没した天和二年に沾徳は二十二才だから入門はそれ以前、春正の没後は原安適と同じく清水宗川にいったようである。やはり『随筆』に「先年清水宗川病後会に」という引用があつて、歌会に出席する機会もあつたのではないかと思われる。安適や露沾こと義英の名は中川文庫蔵『宗川月次』にみえるのだから沾徳もあつて然るべきである。宗川は、こ

れも中川文庫蔵『清水宗川聞書』に

一、宗川曰、一位殿宗川に仰らるるは、汝は晴之哥よむときかが心得るとのたまふ。宗川曰、晴と申て高貴之人の御前にてよみ申たる事なし。或は予に応じたる貴人の前にてよみ、或は点取など仕る時を晴と存候。さやうの時は一きは規模の有やうにと存、次には難なく嫌詞も無之様にと存じ候と申。一位殿被仰候は、難無嫌詞もなきやうにと思に憂晴なし。いつもさやうに思たるがよき也。

(後略)

ほか非常に筆繁く一位殿の意見を記しているところから、従一位権大納言飛鳥井雅章に直接歌学を聞いていた事が証明される。その瀬度から推しても、沾徳が宗川についていれば、間接に雅章の歌学を聞かされた事はまちがいない。同じく『聞書』によれば「元禄十年丁丑十月廿日宗川死去。十八日誕生日にて有しゆへに、此日に死べきと覚悟してやら、内々遺言など有。」「寺は法花宗谷中法恩寺、今は本庄に有。主一堂逝翁宗川居士」という事で、沾徳と同じ菩提寺である。宗川の没後は同門の、といつても十五才程年長らしいが、原安適と末長く交際している。『随筆』に自分の歌や其角の句の安適評を録しているし、「先月庭柯の花にて安適などまねきし比探題の二首」として歌を記している。春正と宗川は共に寛文四年頃水戸家の万葉集研究に招かれて江戸に下っていたわけで、「手伝二、三人御付、江戸京橋町屋にて下組書寄等仕候」(「史館旧話」森説による)とある。その研究助手の一人に「吾邦の書籍の本拠を搜出すは春正門人原安適なりき」(「兼好法師伝考」小高説による)という。安適が早くからこれほど春正や宗川に親炙していたとすれば、安適自身も直接に雅章の歌学を聞く機会があったのではあるまいか。宗川の住居は京橋南二丁目(貞享四年板『江戸惣鹿子』)、森銃三氏は彼等の万葉集研究が行われた「京橋町屋」とはここかと憶測されている。(『近世文芸史の研究』所収「新資料による下河辺長流伝の研究」)安適もまた京橋の住(曽良日記)、沾徳の住居が後述する如く五郎兵衛町であればすぐ近くであるし、また通り町のどこであつても遠くない距離であつた。この水戸家の万葉集研究グループに学んだ事が、後の『一字幽蘭集』の出典註や作法書の執筆にどれほど役立っているかれない。

蟬なくや其人からも水戸岩城

沾徳

さる画讃の句であるが、風雅の大名として光圀と風虎の人柄を並べ称している。内藤家はいうまでもないが、万葉集研究グループを通して水戸家に、沾徳が若き日の憧憬を抱いていたことが察せられる。そしてこの二家の周辺に雅章の影は色濃く漂っていた。

時に連歌の文学層を次第に浸蝕していた俳諧は、いわゆる談林的方向にひきずられて連歌を駆逐し、延宝末年にはほとんどその位置をとって代っていた。第一文芸として一段上に意識されていた連歌の消滅は、俳諧から第二文芸としての意識を払拭した。相対的に規定されていた俳諧の文芸的品格はここで枠をはずされたに等しい。この文芸秩序の過渡的混乱の中で、貞享から元禄にかけての蕉風は一番抒情的な、いわば最右翼の線を進んだものとしてよからう。この線を導いて来た幽山や素堂は、一方で戊戌の『不求橋梨本隠家勸進首』に加わって歌壇とも交った。歌壇からも安適のように俳諧の抒情に関心を寄せた例がある。京都からの移住勢力を触媒として、各々に貞門に對立しながら新興した江戸の俳壇と歌壇であるが、その歌壇にかつて歌学を樹立した人こそ、寛文年間を武家伝奏の役にあつた堂上派歌人の雄飛鳥井雅章であつた。『清水宗川聞書』にその指導の若干をみると、「一位殿のつねにの玉ひしは、とかく歌はやすいがよい也。やすいようにやすいやうにとよみさへすれば必上手となる事也。少にてもよくよみたがりめづらしからんなど思心有にて、其まゝあしくなる也。」とし、「一位殿つねに仰られしも、歌はめづらしきを詠て人にほめられてそれをたのしむと思は非也。それは人の耳を悦ばしめたる人のもの也。わが思ふ事をすぐに歌にのべて心をはらしたる処が本也。」とし、また「飛鳥井一位殿老後の遺言に三位殿に被仰候は、只まつたく直にして心を常に歌にかけて思ひいで、一ふしあらせんとも思はず、すてぬやうに心かくれば、いつの間にやらあがるもの也。」としている。心を第一にして趣向を排するところ『詠歌金玉論』の雅章の言とも一致し、「又一位殿の仰らるるは、とかく何事も無がよき也」と極言するところは、芭蕉の「俳諧はなくてもありぬべし。」に相通ずるものを感じしめられる。団水の『特牛』に「飛鳥井殿古今集の説に、はいかいといふ事は世間にはあれたるやうなる詞などをいふとおもへり。此集のころはさらにしからず。ただおもひよらぬ風情をよめるをはいかいといふ也と申されし。」とあるより推しては、俳諧にも表現より発想の新鮮さを求めていたのではないかと想像される。芭蕉が『笈の小文』に記す鳴海の知足亭で、「飛鳥井雅章公の此の宿に泊らせ給ひて、都も遠くなるみがたはるけき海を中にへだてて、と詠じ給ひけるを、自ら書かせ給ひて、賜はりける由を語るに」と慕わしげに句を詠むのも、このような背景を負つてのことであつた。その背景を考えれば、治徳に関して誤れる伝説が生れたのも故なき事ではなかつた。

三、素堂

調和・露言・露沾・其角を結ぶ線の中央に治徳を置いて考えて来たが、彼をして『ひとつ星』を捨てて『続虚栗』に向わしめた契機にもう一つ素堂の存在がある。『随筆』の「山素堂子去る中秋にみまかりぬ。年行指折て驚く事あり。予を入徳門に手を引そめて四十年、

机上の硯をあたへて三十年、今に持来りて窓下に置。」という記事に注目したい。素堂が没したのは享保元年八月十五日、それより遡つて三十年といへば貞享四年、四十年といへば延宝五年に当る。鈴木説は右を「入露門」として引用し、内藤家入門の事と解釈しているが入徳門とは『昌平志』巻一の「寛文辛丑重修孔廟図」に「廟門二座、為三杏壇一、為三入徳一、并掲三扁額一、林恕門人樋口栄清書、横扁平書」と説明があり、忍岡の文廟の外門である事がわかる。つまり、当時もつとも權威のあつた官学の元締林家への入門を意味している。素堂が内藤家入門を手引きしたとすると、それ以前の素堂との出逢いが問題になるが、露言の手引きで内藤家へ出入するうちに幽山一派の有力俳人素堂と逢知つたとすれば無理はない。彼の林家入門は、仕官によつて新しく身を立てるべく風虎の推挙があつたものと考ええる。その手引きをしたのが、かつて林春斎の門に学んだ素堂であつた。小高説は『升堂記』のうち正献先生の元禄七年の条に水間沾徳の名が残っている事を指摘し、しかし入門の時期はそれよりもさかのぼつて延宝末年二十才前後ではないかと推定するがほぼ當っている。素堂は延宝六年夏の頃から翌年春の末まで長崎に旅行しているから、その前とすれば少し早すぎる気もするが、四十年前と符合する。とすると正献先生鳳岡の門とするにはまだ鳳岡は若すぎるので、小高説は続けて「升堂記に鳳岡門となつていても、素堂と同じく、実はその父鷲峰門下で、鷲峰没後になつてその嗣をついだ鳳岡にも師礼を執つたと考えたい。」とする。

林家に学んだという事で思い当るふしが二、三ある。『一字幽蘭集』に

徂徠子京へゆく時、帰る日をちぎりて

死るよりましと待日や玉やなぎ

沾徳

とあるのをもしも仮に荻生徂来とすれば、林家で共に学んだ故の仲と考えられる。但し、本集の出版までに徂徠は上京していないので、幕府の咎めをうけて上総に流される父に従つた折の別れを、言葉を憚つたものかと思われる。「死るよりまし」という惜別も尋常ではない。とすると「予十四にして南総に流落し、二十五にして赦に値つて東都に還る」という時期は延宝七年から元禄三年に当る。徂徠が林家に学んだのはそれ以前であるから、沾徳の入門も「玉やなぎ」の季にしたがって延宝七年の春以前という事になれば、やはり前述した如く素堂が長崎に旅立つ前まで遡らせねばならない。

徂徠は後年朱子学に反抗し性理の学を攻撃したが、沾徳は『一字幽蘭集』の趣向たる一字題の字義にまことに教科書通りの理解を示している。和漢の教養を傾けたこの処女撰集は、冒頭に百部に余る引用書目を掲げていささかの学を衒っているが、その中に『性理大全』

がみえる。

性一ハ生ズル時天ヨリウル所ノ一箇ノ道理。

心一ハ一身ノ主君ナリ。善惡ノ二ツアリ。性ト情トヲカナタリ。

情一ハ人心ノタクマズシテ有ル処。故ニマコト、ヨム。ヨロコブベクシテ喜ビ、悲ムベクシテカナシム。

志一ハ心ノユク所。心ノ専ラ其事ヘユキムカフヲ云。

これら一字題の付註は『性理大全』を以て自ら考証しているかというに、全く北溪先生陳淳の『性理字義』によっている。というよりも直接には林羅山の『性理字義諺解』（万治二年刊）によっているというがよからう。煩をいとつて引用しないが性については卷一性字の「論性即理^{ハチナルヲ}」^一、心については卷二心字の「論心為^{ハタルコトヲ}」^二「身主宰^ノ」^三「論心有^{コトヲ}」^四「論心合^{スニムコトヲ}」^五「理氣^ヲ」^六、情については卷二情字の「論情者心之用^{ナルコトヲ}」^一、志については卷二志字の「論心之所^ヲ之為^{ユク}」^二「志^ト」^三の解にほとんどそのままの言葉がみつかる。

仁・礼・義・智の題に各々春・夏・秋・冬と註をつけているのも、卷二仁義礼智信の「論五常各有^{ルコトヲ}」^一「界分^ヲ」^二の解に説明が出てくる。これまた林家の学を奉じた事の傍証となるものではあるまいか。

素堂に関してはまた『隨筆』に「山素堂子さりしは八月良夜みまかりぬ。宗鑑の下の客いかに宿の月といひしは三十年已前也。是をおもひて猷子雁山にいひ遣す。」とあるが、素堂が「宗鑑老下の客いかに月の宿」と詠んだのは延宝五年の『六百番誹諧発句合』で四十年前になり、ここに十年の感違ひがあるが、『六百番誹諧発句合』当時の素堂を知っていたとすると、延宝五年頃の内藤家出入、ひいては林家入門をもいくらか裏付ける事にならう。更に延宝八年刊『誹枕』（幽山編）への入集は、露言というよりは本集に親しく序をよせた素堂の引きかと思われるし、調和系から蕉門グループへの転身を可能にした『続虚栗』入集も、本集に強いて序を乞われた素堂の引きが大きかったとみなされる。この後の其角と沾徳の大いなる提携は、素堂がその端緒を作ったのである。『続虚栗』が出版された貞享四年は「机上の硯をあたへて三十年」に正当する年であるが、これは鈴木説のいう如く立机式の賀を意味するものであらう。ここにも素堂のとりもちがうかがわれる。

そればかりではない。前述の如く素堂や幽山が『不求橋梨本隱家勸進百首』に参加する程に歌をもよくしたとすれば、沾徳を春正・宗

川の門に導いたのも、後の安適との交渉を考慮して素堂とする事ができるかもしれない。春正と林春斉に交渉があった事は森説に指摘があり、その面からの素堂とのからまりあも想像できよう。

かく考え来たれば、素堂は漢学においても、俳諧においても、歌学においても沾徳の導師であり、従って末長く兄事して来た人であった。先にその前文を引いた追悼句の後に、「世に長居して居る迄か世界何のかはる事もなし」と寂しげな口吻をもらしているが、素堂を失う事は、彼が文学に志した若き日の証人を失う事であった。はからずも俳壇の覇者に祭りあげられた沾徳が、晩年しきりに懐旧的言辭をもらし、ともすれば雅文学への回帰を示すのは、時代の過渡期を長生きしてしまつた無抵抗なるが故に無意識の悲哀感ではなかつたか。詩歌とも交流しながらひととき高揚した抒情の世界を支えた人々は、次々と去つて逝つた。享保が近づくと文芸秩序の過渡的混乱も次第に左右の振幅をせばめ、かつて連歌から俳諧が独立したように俳諧から雑俳が独立し、談林俳諧が連歌を駆逐したのにも似て、雑俳の盛行は蕉風的な抒情を俳諧から駆逐した。かくて俳諧は詩歌に対する第二文学としての安定した位置を得たのである。明確に近世的な雅俗の觀念によつて整理されてしまつた文学の世界で、俳諧は俗文学として専門の俳諧師とそれを娛樂として楽しむ人々にゆだねられた。俳諧は趣味化し、俳諧師は完全に職業化した。江戸座の今に、あの日のあの世界はもう望むべくもなかつた。

四、合 飲 堂 由 来

其後惣鹿子と題せるものあり。是は元禄二年の撰にて、鹿子の誤をただすよしの序あり。序者は松月堂不角なり。惣鹿子にのせしは

本庄三十間堀	本町一丁目川岸	石町四丁目	山下丁
芭蕉	幽山	才丸	工呷
南小田原丁	日本橋一丁目	伊勢町	伊勢町
蝶々子	調和	不ト	キ角
五郎兵衛丁	石町一丁目	南伝馬町	伊勢町
山夕	嵐雪	露言	一晶
本町三丁目	五郎兵衛町		
立志	沾徳		

(随斎諧話)

貞享四年板藤田作の『江戸惣鹿子』の誤をただしてあらたに登録されている俳諧師は、工呷・蝶々子・山夕・嵐雪・立志・沾徳の六

人、この間に通俗的な意味で宗匠としての地位が認められたわけである。先の考察通り、貞享四年頃に立机式が行われたとみて矛盾はない。『一字幽蘭集』に「沾徳万句し侍ける頃巻軸の発句望侍りしかば申つかはしける」と詞書する聞幽の句は、この際の万句興行であったろう。

聞幽とは信州諏訪侯忠虎（法名、彰住聞幽洞虎院）であった。忠虎の母は内藤忠興の養女であったから、風虎は義理の伯父に当った。その影響か父の忠晴も茂睡の『鳥の迹』に入集するほどに歌をよくし、また露葉と号して俳諧も嗜んだ。『奇人談』に「はじめ露葉といひ」というのは従って誤りである。実は露沾の一字「沾」と、露葉の一字「葉」をいたいだいたのが彼の初号沾葉であった。彼はそのはじめから、この内藤家につながる諏訪侯の知遇をも受けていたのである。沾徳に改号してからであるが、露葉とは露沾・露言・才磨・立志・山夕で一座する「西鶴点江戸点者寄合俳諧」（東明雅氏紹介「西鶴研究5」）なるものがあり、聞幽にはその家臣等で一座する「河東の会」歌仙が『文蓬萊』に収められている。露葉が元禄八年に没すると、聞幽は直ちにその遺領を継ぎ翌年はじめて封地に赴いた。その時の句が同じく『文蓬萊』に

相続せし時

湖や我手に賜ふ夏の月

聞幽

聞幽公の帰城を送り奉る

綺羅ほめて又寝るも有萩の露

沾徳

とみえるが、以後は両者の関係は密接でなく、山夕が専ら近づいている。拙稿「京極高住の俳諧について」（語文研究11）も豊岡侯と幽山の関係を調査したが、大名と宗匠ひとりひとりに関したこのような作業の積みかさねによってはじめて、江戸俳壇の実態と特質は真に明らかになるであろう。あえて横道にそれた所以である。

論をもどして、元禄二年の『再訂江戸惣鹿子』出版当時、沾徳が五郎兵衛町に住んでいた事は、不角の編集であるから信じてよいのだろうか、すると『随筆』に

一、元禄三庚午年元日

家をうつしてもなほ市に遊ぶ今朝は又行く人の暖く歩むを

去年やけふ勉て休む牛車

沾徳

とあり、やや句形が異なるが同じ句と思われるものが『一字幽蘭集』に

通り町に住ける比、試筆

去年やきのふつとめて休む車牛

沾徳

とあるのをあわせ考えると、元禄二年末に五郎兵衛町から通り町の表筋に転居した事になる。この点、沾徳に記憶違いのない限りは「年譜」を訂正しておかねばならない。更に『一字幽蘭集』の句の前書は、元禄五年の出版当時既に通り町に住んでいなかった事を物語り、「見て居るか宿替好の松の月」(皮籠摺・小弓俳諧集)という元禄十二年の句も、居を転々とする我が身への言いかけがあるように思える。『随筆』にはまた享保二年夏かと思われる「賀沾徳新宅」の三ツ物がみえるが、これが『綾錦』に「住中橋」という妻子と共に落着いた最晩年の住居だったに違いない。おそらくは三ツ物に一座する鋤鋤公の援助によって成ったものであろう。

彼がはじめて合歓堂を称したのは、その中で、先にのべた元禄三年の通り町の居であった。『一字幽蘭集』に

来根川にあそびし時、農家なる夜合^{ネム}をもらひて弊居にうつし侍るとて

市に出てぬるを我名ぞ合歓^{ネム}の花

沾徳

とある。芭蕉を植えて芭蕉庵と号し、「此陰にあそびて風雨に破れやすきを愛」したのは、素堂・其角を介して既に親しい桃青であった。二人とも仕官の道に挫折して遂に俳諧を業とするに至る、似たような過去を背負っている。その芭蕉が「予が風雅は夏舛冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし。」といったあの厳しさはないにしても、「誰かすく用ひられぬを合歓の花」と寓意をこめる沾徳もけつして積極的な業俳ではなかった。その証拠にはほとんど前句付に手を出していない。これは『江戸土産』等にもみる同輩達と違ふところであった。俳諧の点にしても、他の宗匠のように点印を刻まない。中村俊定氏蔵の写本『俳諧之連歌』は一蜂・無倫・嵐雪・立詠・沾洲・不角・介我・沾徳・杜格・調和・桃隣・秀和・英風の点割列式をかがけるが、点印を持たないのは彼だけ、馬琴に「さしも名高き点者なれども点印も刻せず……当時の質朴を偲ぶ一勘とすべし」(耽奇漫録)と言わせた所以である。幕末の業俳の上には理解できぬブライドだったのであろう。「芭蕉を移す詞」は「菊は東籬にさかへ、竹は北窓の君となる」と書きはじめられているが、このような態度は遠く、門に五柳を植えて五柳先生と称した陶淵明にまでつながる隠逸の風に、己を気取るものであった。しかし『一字幽蘭集』に「市廓にはさま

れ居てたまたま浅草川にあそぶとて」と前書する沽徳の句があるが、その浅草川辺の水郷に結ばれた芭蕉庵と違って、合歓堂存するここ通り町はお江戸日本橋を起点とする目貫通り、元日以外は車牛の往来にもぎやかに、諸職人が軒をつらねて住んでいるような市中であった。そこから程遠からぬ堀江町の其角も、『続虚栗』中の句に「結^レ 處^ニ 人境^一」と詞書しているが、陶淵明の詩は「而無車馬喧^一 問^レ 君何能爾 心遠地自偏」と続く。通り町に市隱を気取った沽徳の起居はとうに、『水精宮』に収める敬雨・仙鶴・巴人の追悼三吟の詞書に「平生清談客たへず、好事の乗馬門に多し。されど市中に閑をいだし、常にねふりをこのむ癖有。一とせ其角集に、沽徳は枕もいらすのどかにて、とものしけり。さるゆへにねふの花を愛して堂を合歓と呼。」と記されている。芭蕉が「風雨に破れやすき」所にその本情を見出したのに比して、同じく「用ひられぬ」を愛しても、沽徳の場合はあくまで「ネム」に「睡り」をひびかせた趣向が先立っているのである。そしてその趣向故に彼の居睡りは有名になった。「夏の夜のうたた寝も哉年忘」（富士石）と早くからその徴候はみえているが、轍士の『花見車』に「つとめの内ねむらんせずばよかる」と評されているところをみると俳席においてもしばしば睡ったものらしい。「連歌俳諧の席にて殊に睡のきざすはうるさし。これらの座に限らず、夜にても昼にても、ふくべを木につるしたるやうに時ならずあたまをぶらりぶらりとふらめかすは、其身の行跡つたなくおぼゆる。さればねふりの犯さぬ薬あり、ゆめゆめ相伝なき事なれどもあらはし侍る。」（『京童』巻三）という程に当時いましめられたものだが、沽徳に関しては半ば伝説的になって必ずしも印象は悪くない。たとえば乾什の『寝睡弁』（寛保二年刊『庭の巻』所収）には「沽徳翁は覺ずして点に妙あり。是等もいつを昔の倂にて霞つより霜重りて幾年にかなれる。」とあり、『東風流』（宝歴六年刊）に収められた露沾の発句「得たる哉畑うつ男眠る鬢」による脇起しの歌仙には「長閑なりけり水間沾徳」と春來が脇を付けている。いずれも江戸座内部の言い伝えて好意的なのかもしれないが、沽徳ののどかで大らかな人柄をいつている。

もともと居睡りを癖とするような性格には、積極的とか野心的とかいう評言は当たらない。少くとも意志的とかストイシズムとかとは反対の概念を予想する。つまり興味の執着が弱いわけだから、内的真実を求めて一つの境地に沈潜するとか、新しい境地へ精進するとかいう厳しさはない。その代り一点に集中しない興味は、浅くとも広く諸芸を吸収して街学的となる。しかも俳席で居睡りするようなある種の神経の太さは街学的性向と結ぶ時、些細なニュアンスにかかずらわれない物事の論断を可能にする。例の「判読の博士」といわれる所以である。詩人としてのデリカシーの欠如は、むしろ指導者には適していた。頼原説がその事は認めている。詩人にあらざれば、多芸はむ

しろこの時代の庶民の理想でもあった。まこと一芸に秀でたとは言いがたい治徳が多芸ではあった。

林家に学び、春正・宗川に学んだ詩歌の教養は、『一字幽蘭集』や『隨筆』に披瀝され、『枝葉集』等を成す素養ともなったが、それ以上のものではなかった。その方面での入集は知らない。多少の実作を拾えば、『隨筆』に漢詩「病床吟」があるが、彼の俳風にもつながらる奇矯な見立てがあつて、戯れの作としか思えない。和歌は

月影も菊に更行秋の野をはるかに作るまかきにそ見る

花 忘 老

やく塩のからく老てもわするるや花の浪越春の木の下

折 花

家つとになすにつけても咲花を折過さしの心をそ見る

羈 中 聞 鶯

夜をこめて出ぬる星はくれ竹の端山に明る鶯の声

首 風 夏 蓮光時当座

花の香の残る袂をふく風もけさより夏の衣手の森

寒 叢 残

霜の後も猶かれのこる冬草のならんさか見ん色としもなし

旧年旧知の人を進めて藤川百首詠し事ありその巻頭

たのみこし関の藤河春来ても深き霞にしたむせひつつ

西宗津が隠居せし時とふらひてよめる

つとめこし道もゆつるのよはひもてなを木の下に老やかくさむ

叉魚かむすめにおくれける時云遣す

みるふさのをいゆく末も見ぬ事をかけても袖の波におもはむ

伊勢の海の貝やひろはん玉櫛やちよの春もこゆるとし波

等があるが、とりたてて云々する程の事もない。その他、点印を彫らなかつたのは『奇人談』によれば能書の故というが、現存の筆蹟類はそれを裏付けており、また、例の両吟註に「徳専藏鞠ヲ好ム」とあり、『随筆』にも鞠師宗林に手向けた句などがみえてこれをも首肯させる。「また舞曲に堪能なりしかば」とある『俳諧名家列伝』の記事は概ね信憑性にもとるが、『俳諧人物便覧』にも羽衣道士の号がみえるので何か拠る所があるのかもしれない。自ら舞わないまでも彼が歌舞伎役者をひいきにした事は其角と同様で、最も親しかつたのは中村少長と市川三升である。少長は芸名七三郎、江戸名物男三幅対に数えられた和事の名人で、活徳は宝永五年その死に当って「弓流す恥もなき身に彼岸哉」の一句を手向けたが、『父の恩』によれば

活徳翁は合歓堂、古少長は杏実、庄五郎もともに一蓮の法恩寺なれば

合歓杏子尋ねやすさよ墓並び

八町

とあり、自らもやがて同じ墓所に永眠した事がわかる。その『父の恩』の編者三升また二代目団十郎で、『在し世語』に「葛飾牛の御前奉納せし絵馬あり。軸は活徳・洲・超波、世に鳴し宗匠達也。世に才牛（三升の別名）又沢村宗十郎表徳納子・坂東彦三郎表徳薪水並びし中に」とある如く、活徳門の俳人でもあつた。「父にも師にも似ては芸にあらず。をのれ独秀る所なくては也。……俳諧も右のごとく的心得有べし。」として与えた一句「しやか父に似て似ぬ所頭巾哉」が「市川三升につかはす発句」として『随筆』にみえている。このような点、また同じく『随筆』に、上京しては「嶋原の興尽て明るころほひ伏見の船出にて半酔半醒覚やらぬ」といった態、其角と洒落風の土嚢を等しうした艶隠者だつたのである。

「若年より芸にあそぶ人をうらやむ」活徳は、次第に身を以て芸にあそぶ人となつていった。素堂と親しんだのもその多芸の故にである。しがし、無能無才を標榜して逆説的にこの一筋につながつた芭蕉とは反対に、有能多才が彼を真の意味の詩人にしなかつた。芭蕉が次々と新しい詩境を拓いては、その都度連衆を新たにし、やがて行く人なしに秋の暮の孤独をかみしめるあの妥協のない詩人の潔癖さは、性格的に活徳は持ちあわせなかつた。「文にあそぶ身」と自分を規定する活徳は、他のあそぶ人に対してもまた寛容であつた。

俳の風舂つたなき道にあそぶ人をかなしむ

異草もつまぎり捨じ菊の苗 コト 沾徳

『一字幽蘭集』所収の句であるが、清濁あわせ吞んで沾徳は利器となっていた。来るを拒まぬ合歓堂には、「平生清談客たへず、好事の乗馬門に多し」とあった。『随筆』にしろれる交友の広さ、『後余花千二百句』連衆の俳系の雑多さを以って推しても知るべしである。例の両吟註に「徳ガ温和ヲ云」とあるが、彼の性格でもあり、風格でもあったろう。

元禄十二年の「川筋や卯花あれど妻子持」（伊達衣・小弓俳諧集）は、やがて初老に達する我が身の上と思われるが、家庭人としての彼も、きわめて俗人であった。両吟註は「夫婦よい中稻かるたや門の月」に「徳闇房ノムツビヲ述タリ」と記すが、「身にしむと妻や云出て天の川」（末若葉）などは自ら愛妻ぶりをのけたような句で、比翼墓ももっともと肯かせる。また『随筆』にみえる半蔵の上京に際しても、「他人への餞別とは違ふ親子の情をよする」として「見ぬ所手をやひきもの神の春」、「坂本常信へ云遺ス」として「世話聞ぬ耳やのけ置郭公」と子煩惱なところをあらわにしている。

なるほど詩人として評価するなら俗物に違いないが、けっして積極的な野心家ではなかった。内藤家代々を中心として大名衆に有力なコネクションがあったから、豊かならずとも収入は安定していたし、経営に敏腕な弟子に恵まれたため、自らは例の居睡りにのどかな日を過しているうち、まわりが彼を中心に組織化されてしまったといった風があった。その経緯については、洒落風の論とあわせて稿を改めたい。彼の為人を説くにとどめて、甚だ雑然とした本稿の結びとする。

御指導いただいた中村幸彦先生はもとより、御多忙中をお煩わせして御教示願った島居清氏ほか本文中にお名前と説を引かせていただいた方々の学恩浅からぬものがある。ここに記して厚く御礼申しあげる。尚、本研究は昭和三十八年度文部省科学研究費（総合）による成果の一部を含む。